

# 芥川龍之介書簡 佐藤春夫宛（全集未収録）

河 野 龍 也

【年代】一九一七（大正六）年四月一七日

【体裁】封書（封筒墨書・本文ペン書六枚）

【消印】横須賀 6・4・18 前 10・□（表）

下 谷 6・4・18 后 3・□（裏）

【切手】三銭

【封筒表】東京市下谷区谷中

清水町一江口渕様氣附

佐藤春夫様

【封筒裏】

緘

かまくら

芥川龍ノ介

四月十七日夜

【本文】「十ノ廿 松屋製」青野二〇〇字詰原稿用紙

三四日 京都と奈良へお花見に行つてゐたんで、今日や  
つとあなたの手紙をよみました 先へはかき（<sup>（カキ）</sup>）をよんで、  
それから封書の方をみたんですが、不足税も何もとられて  
ゐないので 大に可笑しくなりました あの封書へスタン  
プを押した郵便局員氏に（<sup>（アゲル）</sup>）感謝する価値があります

公治長<sup>（1）</sup>の五十枚には少し驚きました 僕も書かんとして  
つある小説の中に 公治長<sup>（2）</sup>が<sup>（アゲル）</sup>あります 鳥の聯想で、フ  
ランシスの事を書いたものを見てゐるうちに 書く氣にな  
つたんですが 甚へんてこなものです 書けたら 発表し  
ますから よんで下さい 尤も何時になるかわかりません  
勿論あなたの公治長が発表された後です

秋成<sup>（3）</sup>は 前にすぎでした 今でも嫌ぢやありません 併

しあの文章は 清少納言などにくらべると 少し土臭い所があるやうな気がしますが、どんなものでせう

僕は今、眼をつぶるやうな気で、いやな小説の続稿<sup>(1)</sup>を書いてゐます 前からの成行き上快漢口ロオ<sup>(2)</sup>みたいなのを

どうにか書きぬけなければならぬんだから 心細くていけません

僕論は あなたがやめると云ふと ちよいと見たい気もします とにかく 天邪鬼ですからね

それから犬は 僕も二匹飼つた事があるんです さうしてそいつを二匹とも 犬殺しに殺された事があるんです<sup>(3)</sup>

その二匹だけは、今でも可愛い気がしますが、あとのやつはいけません これは矛盾ではありません 或は矛盾にしても 人間の心が始から持つてゐる矛盾です

流行児扱ひをするのは 世間がするのなら いいが、あなたがするのはいけません これは全く恐縮だから 御辞退します 現に今月も 孤月君に(孤月君では少し二枚目がたきですが)こき下されてるぢやありませんか<sup>(4)</sup>

アナトオルフランスは 僕は十二三冊よんだ事があります ペンギン鳥なんと云ふ奴は フランスの歴史にリファ

してあるんで その方面に無学な僕にはつまらなかつた覚えがありますか あとは大抵面白くよみました ペドオク

女王の庖とか何とか云ふやつを よんだ事がありますか

あいつは フランスの駄弁を最よく表現した作だと云ふ気がします この頃又思ひ出して「白い石」をよんでゐますが、やつぱりうまいですね

ああ云ふ人は沢山ゐますよ 芋粥<sup>(5)</sup>だつて 大に新小説の編輯<sup>(若カシ)</sup>君には 評判が悪かつたんださうです

これからぬます

以上

十六日夜<sup>ママ</sup>

佐藤春夫様

芥川龍之介

梧下

## 注

(1) 孔子の門人。鳥語を解したとされる。一九一六年の郊外生活中、佐藤はこれを題材に執筆したが、編集者に原稿を紛失され、幻の作品となった。

(2) アッシジのフランチェスコ(一一八二―一二二六)。清貧思想で知られるイタリアの聖人。鳥に説教した逸話がある。

(3) 上田秋成(一七三四―一八〇九)。江戸後期の国学者・歌人・読本作者。

(4) 芥川の小説「偷盗」(『中央公論』一九一七・四・七)。

(5) 一九一六年二月に日本公開されたアメリカ映画。

(6) 狂犬病予防のための野犬駆除で犠牲になったということ。芥川の犬嫌い、佐藤の犬好きは有名。佐藤の作品に「西班牙犬の家」(『星座』一九一七・二)がある。

(7) 中村孤月(八郎)の文芸時評「四月の文壇を評す(三)」(KHN生、『読売新聞』一九一七・四・二〇)。

(8) アナトール・フランス(一八四四―一九二四)。フランスの作家。

(9) 芥川の小説「芋粥」(『新小説』一九一六・九)。

\*翻刻は、仮名遣いを原文通りとし、漢字は常用漢字に改めた。

### 【解説】

佐藤春夫は一九一〇(明治四三)年、新宮中学(和歌山県)を卒業して上京。新詩社で与謝野寛(鉄幹)に師事し、慶應義塾で永井荷風に学んで文学修行に精を出す、鋭い才気が災いして孤立。一九一六(大正五)年には神奈川県都筑郡中里村(現横浜市青葉区)で「隠棲」を余儀なくされる。

その生活にも行き詰った頃、東京帝大の江口渙から同人誌『星座』の発刊計画を持ちかけられ、佐藤は翌年一月

の創刊号に「西班牙犬の家」を掲載した。また、三月号からアナトール・フランスの「人間悲劇」(聖フランシス伝)の翻訳連載を開始し、江口の友人だった芥川龍之介の関心を惹いた。これに四月号の「同人語」で佐藤が次のように感謝を示したことが交流のきっかけになった。

これは江口から聞いた事だが芥川龍之介君は、あれ(注「西班牙犬の家」)を見て、「甘いことは甘いと思ふけれども一種の微笑を禁じ得ない」と言ってくれたさうだ。「甘いことは甘い」は御世辞として――他の何人の為めにでもない芥川君が彼自身のカルカチュアにまで言つた御世辞として見て、「一種の微笑」を禁じ得なかつたのはさすがに芥川君だと思ふ。正直に言へば、作者自身もあれを書きながら「一種の苦し、まぎれの微笑」を禁じ得なかつたのである。自分は芥川君に対して知遇の感をもつて感謝する。○その御礼といふわけでもない、兼々から思つて居たのだが、僕は来月あたり芥川君の芸術を論じて見たいと思つて居る。(略)一代の流行児を捉へて甚だ僭越な申し分だけれども、僕にはこのどこかこの人と共通な何物かがありさうだ。それ故芥川君には不満も多い。これは多分僕の友人達丈けは同感してくれさうに思ふ。

芥川はこれに対して四月五日付で手紙を送り、ここから二人の交流が始まった。その中で芥川は次のように書いている。

あなたは僕と共通なものを持つてゐると書いたでせう  
僕自身もさう思ひます（略）するとあなたの僕論なる  
ものは大体に於て僕自身僕の芸術に対して持つてゐる  
毀譽褒貶（もし幾分の己惚れが許されるなら）と同じ  
事になる訣です、さう云ふ議論を活字で拝見すると云  
ふ事は、多少僕にとつて気味の悪い事にちがひありま  
せん と同時に愉快な事にもちがひありません さう  
云ふ意味で 僕はあの六号をよんだ時に大に恐縮した  
次第です

これに対する佐藤の返事は未紹介で現存不明だが、佐藤は芥川の頼みを聞き、「同人語」に予告した「芥川龍之介論」の執筆を撤回したようだ。またその手紙が長くなり、郵送の切手が足りなかったことを心配して後から葉書で詫び状を出したらしい。

さて、四月一七日付のこの手紙は、芥川から佐藤への第二信である。二人にはまだ面識がなかったが、芥川も佐藤に同類の資質を見出して胸襟をひらき、文学談義を楽しん

でいる様子が窺われる。当時の芥川は作家専業の生活に入る以前。海軍機関学校に勤務していた時代で、書簡にも「横須賀」の消印が確認できる。

ここで興味深いのは、文中に佐藤の幻の作品「公治長と燕」への言及があることである。『詩文半世紀』（一九六三・八、読売新聞社）によれば、それは「西班牙犬の家」と並んで中里村での田園生活中に書かれたものだという。『論語』に孔子の門弟として見える公治長が、鳥の会話を聞いて殺人事件の発生を知り通報したが、逆に嫌疑をかけられて投獄されたものの、牢の窓辺を訪れる鳥との会話によって孤独の慰めを得るといふ話で、〈特異な才能を享けたものが、そのために禍を招いたが、亦、それ相應の福をも受けるというテーマに、いささか当年のわが感懷を托したメルヘン的な寓話〉だったという。不幸にしてその原稿は失われ、佐藤の後年の回想に登場するだけのものであったが、この書簡によつて実在の作品だったことがはっきりした。

四月二二日、佐藤は林原耕三に連れられ、日曜で田端の実家に戻っていた芥川に初めて対面した。ちょうど佐藤が芥川に献呈した「酒の酒」が、『読売新聞』日曜附録に掲載された日であった（佐藤春夫「芥川龍之介を憶ふ」『改造』一九二八・七。文中の作品名「雉子の炙肉」は佐藤の記憶違い）。芥川は歓迎して写楽の版画を見せてくれたりした

が、ふだんは才気煥発の二人も終始控えめだったという。当日、芥川は原稿執筆に忙しく「偷盜」『中央公論』一九一七・四・七）、初対面は短い時間だったという（林原耕三『漱石山房の人々』一九七一・九、講談社）。

二人の出会いはいちように芥川最初の創作集『羅生門』（阿蘭陀書房刊）が五月に刊行されようとしている時期であった。佐藤は六月一日の林原宛書簡でその出版祝賀会を提案し、江口渙と二人で六月二十七日にこれを実現させている。華々しくデビューを飾った芥川をまぶしく仰ぎながら、佐藤も負けじと奮起を誓ったに違いない。

佐藤は翌年、神奈川での「隠棲」生活を内面的に描いた「田園の憂鬱」（『中外』一九一八・九）で諸家の絶賛を浴び、念願の文壇進出を果たした。この手紙は、互いをライバルと認めて高め合ったよき友情の記念品と言える。

なお、書簡の図版はコレクターが『別冊太陽 近代文学百人』（一九七二・一）に提供しているが、全集未収録。難読の筆跡で全文翻刻は恐らく今回が初めてとなる知られざる書簡である。

## 付記

本資料は、実践女子大学が二〇一六年にオークションで入手し、二〇二一年六月一二日から八月二九日まで（コロ

ナ禍により九月二六日までの予定会期を短縮）、船橋市西図書館で開催されたギャラリー展示「文豪・佐藤春夫と太宰・船橋時代に出会った師弟」に出品した（実物展示は八月一二日から二九日まで）。公開に合わせて、国文学科ホームページに「文豪の筆跡」サイトを新設し、図版および翻刻・解説を掲載した。本稿はこれに増補して記録とするものである。資料の調査については、JSPS科研費17K02464の助成を受けた。

（この たつや・実践女子大学教授）





十ノ廿 紙製製



十八廿 候 臘 與

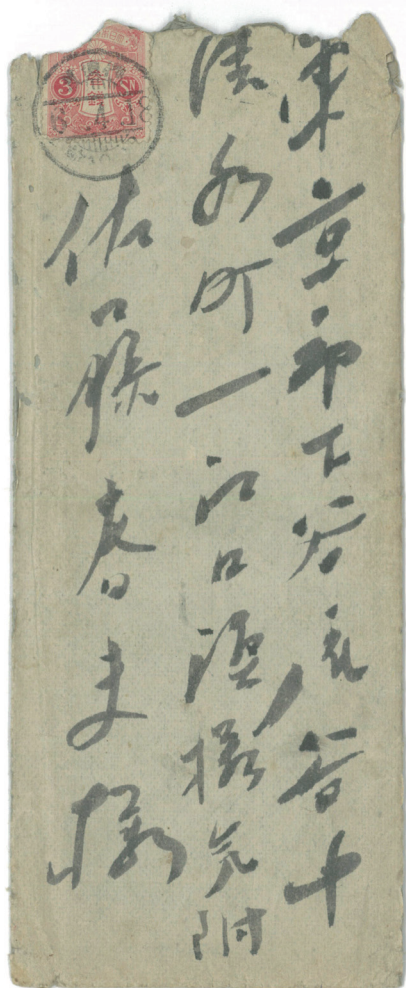
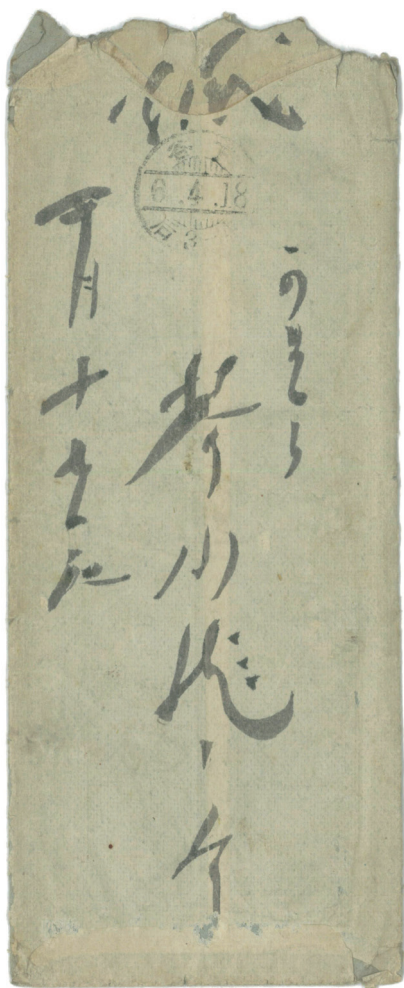


十月廿 敬啟

十、廿 餐 隨 便



[illegible]



縦 193.0mm × 横 78.6mm

封筒